生命（いのち）のにぎわい調査団

生命（いのち）のにぎわい通信

第５３号：発行　令和２年（2020 年）１月

発行：千葉県環境生活部自然保護課
千葉県生物多様性センター

〒260-8682　千葉市中央区青葉町 955-2
（千葉県立中央博物館内）
TEL 043-265-3601　FAX 043-265-3615
URL http://www.bdcchiba.jp/monitor/
E-mail monitor@bdcchiba.jp

千葉県における絶滅危惧種の車軸藻

今号では車軸藻（しゃじくも）という藻類を取り上げます。あまりなじみのない生きものだと思いますが、日本には固有種を含む多種多様な車軸藻が分布し、水の透明度維持に一役買っています。しかし、水質悪化などの要因により、現在多くの車軸藻は絶滅の危機にあります。車軸藻復活の事例として、千葉県立中央博物館学芸員の林紀男氏を中心とするグループの取組についても紹介します。＊にぎわい調査団ホームページに今号で扱ったテーマをより詳しく解説していますので、団員の方はぜひご覧ください（https://www.bdcchiba.jp/monitor/houkoku/column.html）。

車軸藻とは

車軸藻（シャジクモ目）とは、淡水から汽水の湖沼やため池、河川に生息する大型の多細胞藻類です。シダ植物のスギナのような形態をしていることからわかるように、藻類の中でも陸上植物の祖先に最も近縁なグループとされています。南極大陸を除く５つの大陸に１科６属約 400 種が存在しており、日本では４属 74 種（固有種 35 種）が記録されています。

絶滅の危機にある車軸藻

1960 年代に車軸藻の生育調査をおこなった湖沼で、90 年代後半に再調査した結果、発見された車軸藻の種数は 30 種から６種に減少し、多くの湖沼で消失したことがわかりました。千葉県の印旛沼では 10 種、手賀沼では７種が生育していましたが、現在は全て消失しています。消失の要因として、富栄養化、干拓やコンクリート護岸化などが挙げられます。

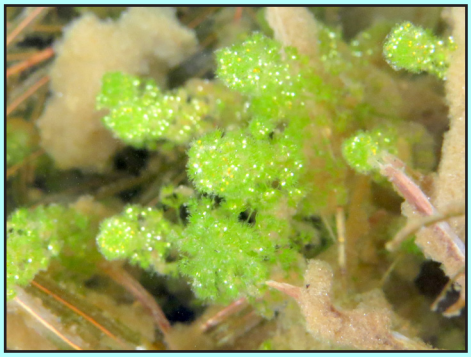
野生絶滅から復活した車軸藻

車軸藻は、卵子が受精すると卵胞子をつくります（図１）。この卵胞子は、ケイ酸質の固い殻で覆われ、発芽条件が整うまで底泥中で休眠します。すでに絶滅した車軸藻でも、底泥を採取しその中の卵胞子が発芽すれば、復活させることができます。印旛沼や手賀沼では、絶滅した数種の車軸藻をこの方法で復活させ、学芸員の林紀男氏を中心とするグループが、千葉県立中央博物館の敷地に設置した水槽内で 10 年以上前から系統保存しています（図２）。以下に、印旛沼産の車軸藻３種を紹介します。

図１　３種の車軸藻の卵胞子

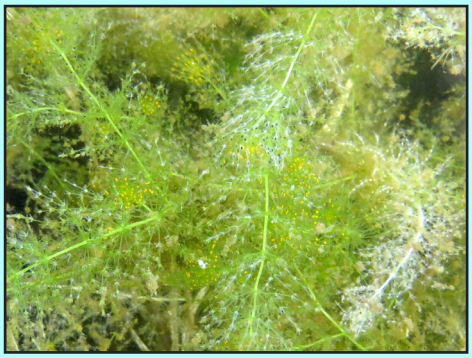
図２　系統保存施設の様子

系統保存している絶滅危惧種の車軸藻（いずれも県立中央博物館で撮影 2019 年 12 月 11 日）



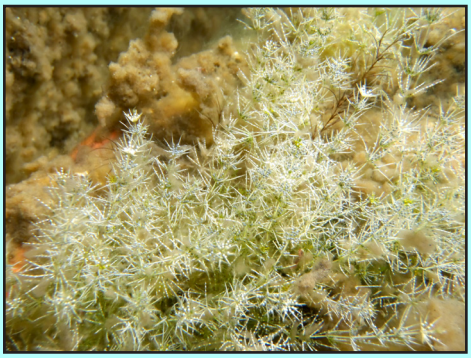
オトメフラスコモ 県：A－B

藻体は高さ 30 ㎝に達し、若い部分は寒天質に包まれる。本種は小枝（しょうし）の内側と外側に副小枝をもつことから、他種と区別される。汽水でも生育できる。本州や種子島に分布。千葉県では印旛沼や手賀沼で自生の記録がある。



ケナガシャジクモ 県：A－B

藻体は40㎝に達する。主軸は皮層に覆われるが、小枝にはない。托葉冠（たくようかん）や苞（ほう）が長く目立つことが特徴。日本全土に分布。千葉県では印旛沼や茂原で自生の記録がある。



ハダシシャジクモ 県：A－B

藻体は 25 ㎝に達する。主軸や小枝は皮層に覆われるが、小枝の基部の１節だけは必ず裸出。この特徴が和名の由来。津軽海峡以南に分布。印旛沼で 80 年前採集されたものが日本の初記録。

＊県：A－Bは千葉県のレッドデータブックのランクです（最重要・重要保護生物）

古典文学と里山の生きものたちの世界

第七回　十二類絵巻の世界

詩人　大島　健夫

日本の古典文学には、様々な生きものたちがいろいろな形で登場します。かつてこの国の人々はどのように生きものとかかわり、その姿に何を見ていたのでしょう。この連載では、昨年度から生物多様性センターに嘱託職員として勤務している、ポエトリー・スラムＷ杯日本代表詩人の大島健夫が、生命（いのち）のにぎわい調査団の皆様を過去の世界にご案内します。

「御伽草子（おとぎぞうし）」というものがあります。鎌倉時代末期に成立した絵入りの物語文学の形式で、貴族の恋愛や人生模様ばかりを描いていたそれまでの日本の物語文学と異なり、色々な階層の庶民や動物を主人公とし、笑いや風刺の要素も交え、多種多様なテーマを扱っています。有名な「一寸法師」や「浦島太郎」なども御伽草子だと言うと、なんとなくイメージができますでしょうか。そんな御伽草子が全盛期を迎えた室町時代中期、日本の中世動物文学の最高傑作ともいうべき「十二類絵巻」が世に出たのです。

時は十五夜。十二支（十二類）の動物たちの歌合（うたあわせ）（和歌のコンテストのようなもの）が催されます。そこへ狸を従者に連れた鹿がやってきて、判者（審判）になりたいと申し出ます。

この歌合が大盛り上がりとなったので、後日、十二類は再び歌合を計画。また鹿に判者になってもらうようにオファーしますが、鹿は体調不良で辞退。そこで「ならば自分が判者に」と立候補してきた狸に対し、十二類はこれを拒絶、理不尽に罵倒したばかりか集団暴行するのです。恥をすすがんと立ち上がった狸は、狐、熊、狼など自分と同じ異類（十二支以外）たちを集め、十二類に合戦を挑みます。

作　石田　理紗

緒戦は、頼みにしていた狼が討ち取られてしまい敗れた異類軍ですが、めげずに愛宕山の天狗の助けを借りて十二類軍に夜襲をかけ、今度は勝利。さらに愛宕山に籠城しますが、十二類軍は辰の作戦のもと愛宕山を挟撃し、異類軍はまたしても大崩壊。逃げ落ちた狸は、こうなったら鬼に化けて十二類を喰い殺そうと悲壮な決意を固めて変身するも、犬に見破られて失敗。世をはかなんだ狸は、妻子と別れ出家し、仏道修行に励みます。やがて正果を得て京都の西山に草庵を結んで隠棲、しかし最後まで和歌への執着だけは断ち切ることができなかった・・・というところで物語は結ばれます。

奇想天外かつ変にリアルで壮大なストーリーもさることながら、狸以下、敗れていく異類軍の動物たちが実に生き生きと描かれているのがこの十二類絵巻の最大の魅力でしょう。狸が妻子と別れる場面は涙なくしては見られないものですし、戦死した狼の息子が父の仇討ちに参戦する姿は実に武士然としています。この物語の作者は不詳です。しかし、権威主義的で、結局最後には勝ってしまう、日本にはいない動物や家畜で構成された十二類に対し、合戦で殺され、あるいは泥臭く生き延びていく異類軍の身近な野生動物たちの姿には、近づいてくる戦国時代の足音とともに乱れゆく世相の中、敗者となって命を落としていった人々への憐れみと悼み、救済を願う心が反映されていたのかもしれません。

＜これからの季節に観察できる生きもの＞

○調査対象種：イタチ、キジ，アカガエル類（卵）、トウキョウサンショウウオ（卵），ニホントカゲなど

○調査対象種以外は種の同定が難しいため、できるだけ写真の添付をお願いします。

「生命のにぎわい調査フォーラム」のご案内

生命のにぎわい調査フォーラムを開催します。調査団員の活動報告や写真コンテストを行いますので、多くの方のご来場をお待ちしています。

日時：令和２年３月７日（土）　１３時００分～１６時００分

場所：千葉県立中央博物館　講堂

定員：先着１００名・参加無料